

落花生「尾鈴」「市房」の育成とその特性について

岡迫義孝・後藤義昭・河原一五郎・関屋 愼・児玉栄一
(宮崎県農業試験場)OKASAKO, Y., GOTO, Y., KAWARA, I., SEKIYA, S. and
KODAMA, E.

On the New Varieties of Peanut "Osuzu" and "Ichifusa".

我国における落花生の消費は、そのほとんどがイロ豆、バターピーナツ及び製菓用である。現在、全国的に栽培の多い千葉半立あるいは立らくだ等の品種は、大粒種で食味はよいが中晩生種で空莢ができやすく、サウザンクロス（以下S.Cと略記する）、ジャワ13号等は早生多収であるが、小粒種で食味が劣るという欠点をもっている。よつて早生、大粒、耐旱性、立性という4つの条件を目標に昭和25年度より交配育種に着手し、昭和35年度に至り当初の目標からすれば充分満足し得ないながらも、一応特徴のある「尾鈴」「市房」という2つの品種が育成されたのでここに報告する。

育成経過

大粒種の早生化という育種目標からして、当然バージニアタイプの品種とスパニッシュタイプの品種との組合せが考えられたので、交配親としては大粒種は種子ヶ島、千葉55号を主体にし、それに宮崎中粒及び宮崎小粒がこれに加えられ、また早生化のためには小粒種のSCとホワイトスパニッシュがとり上げられた。これら両タイプの品種を組合せて、更に正逆交配を行なうことにより16の組合せをつくり、昭和25年度に交配を行つた。雑種F₁~F₃においては有望系統の発見に努め、昭和28年に一応有望系統として大粒種3系統、中粒種5系統を選抜したが、それをF₃とF₄で検討した結果、大粒種はいずれも空莢が多く実用価値なしと認められたのでこれを試験より除外し、

従つて育種目標もここで当初の大粒中生から中粒早生で特徴のあるものということにやむを得ず変更された。

その後は、残された中粒種5系統について引続き選抜と固定化をすすめると共に、昭和31年より生産力検定予備試験を開始、更に昭和33年度F₈においてほぼ完全に固定したと思われるに至つたので生産力検定本試験に移行した。その結果S.C×宮崎中粒（系統番号4）は後記のように耐旱性が強いということで新品種に決定され、昭和36年3月F₁₀で「尾鈴」と命名された。また千葉55号×S.C（系統番号2）は耐旱性はあまり強くないが、その増収性が認められ同様にして「市房」と命名された。

生産力検定試験の結果

昭和33~36年に行われた生産力検定本試験の結果は第2~3表の通りである。なお開花登熟期間中の降水量は第1表の通りで、昭和33年度は旱魃程度大、34年度は小~中、35~36年度はほとんどなかつたとみてよいであろう。

第1表 開花・登熟期間中の降水量(mm)

年次	6月			7月			8月			9月
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬
平年	98.0	139.1	159.9	132.5	84.4	97.9	86.5	107.3	101.1	84.9
昭33	186.8	115.3	32.4	15.4	8.9	2.9	24.3	11.6	135.9	46.2
34	145.6	97.1	3.9	47.4	288.9	0.8	234.1	34.4	6.3	1.5
35	148.7	183.4	45.5	56.7	—	76.8	55.4	95.8	161.0	57.1
36	183.9	0.5	73.3	56.5	4.5	314.0	209.7	181.5	49.0	49.2

(1) 「尾鈴」 いずれの年でも概ね標準品種より増収

第2表 「尾鈴」の生産力検定試験成績

試験年次	試験場	昭. 33				昭. 34				昭. 35				昭. 36		昭和35年農試で行なつた耐旱性検定試験成績 (1株当り上実収量)
		農試	農試	川南町	住吉町	農試	高鍋町	広瀬町	農試	砂壤土	火山灰土	砂土	砂壤土	標準区	乾燥区	
土質	草	砂壤土	砂壤土	火山灰土	砂土	なし	なし	小	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
栽培距離(cm)	程度	大	小	小	中	なし	なし	小	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
品 種		60×30	60×18	60×24	60×24	60×15	60×15	60×15	60×20	標準区	乾燥区	乾燥区/標準区				
尾 鈴	1a当り実収量(kg)	15.6	26.3	21.2	24.1	23.8	24.9	31.4	27.7	28.4	24.2	85.2				
	同上比率(%)	181.4	153.8	107.1	104.8	102.1	94.7	126.1	124.8	96.3	126.7					
サウザンクロス	1a当り実収量(kg)	—	17.1	19.8	—	23.3	26.3	24.9	22.2	29.5	19.1	64.1				
	同上比率(%)	—	100.0	100.0	—	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0					
千葉半立	1a当り実収量(kg)	8.5	—	—	23.0	—	—	—	16.7	26.0	19.6	75.4				
	同上比率(%)	100.0	—	—	100.0	—	—	—	75.2	88.1	102.6					

を示しているが、特に早魃の甚だしかつた昭和33年及び若干旱害をみた昭和34年度の増収効果は大きかった。また人為的に標準区（充分と思われる程度に灌水した）と乾燥区（開花期以後日中2～3時間葉がしおれる程度に灌水を少なくした）を設け、耐旱性検定試験を行なった結果でも、尾鈴は乾燥に強いことが示

された。

(2)「市房」昭和33年度は旱害を受け減収したが、その他の年は増収を示し、特に降雨の順調な年は顕著な増収を示した。耐旱性についてはS.Cと同じ程度であるとみられた。

第3表 「市房」の生産力検定試験成績

試 験 年 次	試 験 場 所	昭. 33 農 試	昭. 34 農 試	昭. 35		昭. 36 農 試	昭和35年度で行なつた耐旱性検定試験成績 (1株当り上実収量)			
				農 試	農 試			標準区	乾燥区	乾区/標区
土 質	早 魃 程 度	砂壤土	砂壤土	砂壤土	火山灰土	砂 土	標準区	乾燥区	乾区/標区	
		大	小	なし	なし	小				
品 種	栽植距離(cm)	60×18	60×18	60×15	60×15	60×15	60×20	標準区	乾燥区	乾区/標区
		市 房	1a当子実収量(kg)	13.4	30.9	23.6	26.2	32.0	37.1	gm
同上比率(%)	72.3		180.7	101.3	99.6	128.5	167.1	28.5	17.6	61.8
サウザンクロス	1a当子実収量(kg)	18.6	17.1	23.3	26.3	24.9	22.2	96.6	19.1	64.7
	同上比率(%)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	29.5	100.0	100.0
千葉半立	1a当子実収量(kg)	—	—	—	—	—	16.7	100.0	19.6	75.4
	同上比率(%)	—	—	—	—	—	75.2	26.0	102.6	

「尾鈴」「市房」の特性概要

(1)「尾鈴」草型は立性で、草丈はS.Cほどは伸びないが千葉半立よりはるかに長い、葉色は濃く分枝数は両親の中間を示し、S.Cよりかなり多く1次分枝7～8本、2次分枝7～10本程度であり、またバージニアタイプの品種のように、株間を広くしたり晩植すると分枝数、特に無効分枝が増加する傾向がある。開花結実は第2次分枝でもかなり多いが、成熟莢となるのは株の基部に近くまとまるので、莢の熟度はよくそろい株当り上実数も多い。

莢は1粒莢も混在するが大部分が2粒莢で、莢の表面の網目がやや深く、質は粗剛でもろい感じをもっている。莢の中央のくびれが浅いために先豆と基豆の接触面が多少扁平となる。粒色は黄褐色であるが千葉半立より淡い。100粒重は70～73gmで中粒種、熟期は早生でS.Cより数日おくれるが、本県においては4月上旬に播種すれば8月末～9月初に収穫できる。食味は千葉半立と変らない。耐旱性が大であることは第2表の通りで、旱害を受けやすい砂土、火山灰土などの軽しよう土地帯の密植栽培においてその能力を發揮

する。

(2)「市房」本品種の著しい特性は、草姿が完全立性でありながら矮性であることである。葉色は淡くS.Cに近い。1次分枝数はS.Cとほとんど変らないが、2次分枝数はこれよりも少ない。従つて大部分の莢は1次分枝につき、株の基部にまとまるので熟度はよくそろふ。莢は2粒莢が普通であるが、莢形は短大で中央のくびれが浅いために、先豆と基豆の接触面は「尾鈴」より更に扁平となり、粒形はあまりよくない。粒色は淡くS.Cに近い。100粒重68～70gmの中粒種、子実の充実は極めて良好で剥実率が高い。熟期は早生でS.Cとほとんど差がない。本品種は分枝数が少なく矮性であるために白絹病にかかりにくく肥沃地の密植栽培に適する。特に条件のよい場合にその能力が發揮される。なお、両品種共にS.Cのように収穫期がおけるとすぐ発芽してくるようなことはない。

以上の2品種は、その特性からして現在S.Cの普及している地帯に、S.Cの代替品種としてまず普及し、場合によつては千葉半立も一部これにおきかえることが考えられよう。